

琉球大学学術リポジトリ

《技術・家庭科(家庭分野)》生活者として家庭生活の
向上を図る授業づくり(2年次):
対話を通して学ぶ「衣生活」の学習指導

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属中学校 公開日: 2015-12-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 東, 町子, 松本, 由香 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/33065

生活者として家庭生活の向上を図る授業づくり（2年次）

—対話を通して学ぶ「衣生活」の学習指導—

東 町子* 松本 由香**

*琉球大学教育学部附属中学校 **琉球大学教育学部

I 主題設定の理由

1 社会的背景

現代社会において、わたしたちを取り巻く生活環境は、社会の変化や科学技術の進歩により、めまぐるしく変化している。少子化・高齢化などが影響し、家族形態は単身世帯や共働き世帯の増加により、家庭生活や子どもを取り巻く環境も影響をうけている。家庭生活を営む上で消費活動においては、グローバル化により安価な外国の輸入製品が市場にあふれ、大量生産、大量消費による物質の豊かな時代となった。また、基本的に家庭内で行われていた家事や育児に関する作業が家庭外の社会的施設やサービスの充実により、金銭を支払うことで、便利に利用することができるようになってきた。先進国においては水やガス、電気などのライフラインも必要なものやほしいものは金銭によって手に入れることが容易な時代となった。

2011年3月の東日本大震災による大災害と原発事故は、自然災害の脅威を実感させるとともに私たちの生活を問い直す契機となった。それまで、電気など料金を支払えば、必要なだけ使用できたものに安全性の保障はなく、リスクがあることに気づかされた。日々の家庭生活から地球環境への影響を考え、有限である資源を効率的に利用するとともに再生産を行って、持続可能な形で循環させながら利用していく循環型社会の理想に近づける行動が必要となった。このような社会の変化から、家庭生活において安全・安心を求める重要性や、家族や地域が協力して生活を営む幸せが見直されてきた。

平成25年6月14日、第2期の「教育振興基本計画」

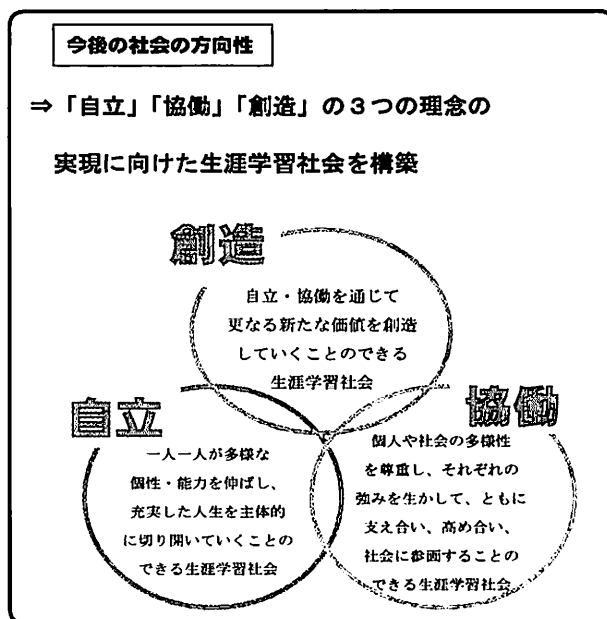


図1 教育振興基本計画⁽¹⁾

が閣議決定し策定された。教育振興基本計画（図1）
の中では、今後の社会の方向性を示された。

第1期計画が学校段階等の縦割りで整理していた
のに対して、第2期では、各学校間や、学校教育と
職業生活等との円滑な接続を重視し、生涯の各段階
を貫く4つの教育の方向性を設定した。

教育行政の4つの基本的方向性

- ① 社会を生き抜く力の養成
- ② 未来への飛躍を実現する人材の養成
- ③ 学びのセーフティネットの構築
- ④ 絆づくりと活力あるコミュニティの形成

「社会を生き抜く力」を生涯を通して身に付けていくためには、初等中等教育段階において、「生きる力」を確実に身につけていく必要がある。中でも、「確かな学力」については、「自ら課題を発見し解決する力」、「他者と協働するためのコミュニケーション能力」、「物事を多様な観点から考察する力」など、自立・協働・創造に向けた力を育成することが求められている。

これらのことから、本教科では生活者として社会を生き抜く力を持ち、未来への飛躍を実現する人材を育成するための「自立・協働・創造」を意識した学習形態や教材、教具の工夫等が授業デザインに必要であると考えた。そのためには、「問題解決的な学習」や「他者と共同する学習」、「コミュニケーション能力を育成する学習」を授業に取り入れることが必要となる。

2 学習指導要領との関連

平成20年3月に告示された学習指導要領の特徴として次の4つがあげられる。

- ①小学校家庭科との体系化をはかるために4つの内容に集約して示される。
- A：家族・家庭と子どもの成長
B：食生活と自立
C：衣生活・住生活の自立
D：身近な消費生活と環境
- ②家族と家庭に関する教育の充実がはかられている。幼児との触れ合いに関する内容が必修化された。
- ③食育推進の観点が明示されている。
- ④消費者教育と環境教育の充実が図られている。

これらの内容から、家庭科の学習は地域社会とのつながりについて学ぶことが重要視されていることがわかる。生徒たち自身が、地域社会に働きかけるような学びの機会を作っていくことが大切である。

家庭科は、今、持続可能な循環型社会や男女共同参画社会をめざす教科としての生活スタイルを見つけ、人生における生き方を課題とする生活者を育てる役割を担っていると考える。

平成21年度の国立教育政策研究所「特定の課題に関する調査(平成19年実施)」の結果から、質問紙調査によると家庭分野の授業が分かると回答した生徒が約80%、家庭科分野の学習は大切だ、普段の生活に役立つと回答した生徒の割合は約90%、衣食住などの生活に必要な力が身につくと、生活が豊かになると回答した生徒は約90%であった。しかしながら、全領域において基礎的・基本的な知識や技術の習得が十分とは言えず、またそれを生活の中で活用していく能力も不十分であると分析された⁽²⁾。

本教科〔家庭分野〕においては、学習する内容が家庭内で習得が可能な教科のため、学習したことをすぐにいかせるという利点がある。その反面、生徒は異なる家庭環境下で育てられたり各家庭の価値観も多様化しているため学習が生活経験と直接的に結びつくとは言えない現状がある。しかしながら、そのような場合であっても生徒が家庭において家庭科の授業で学んだことを実生活で生活者として、いかしていく姿勢を身につけることが普遍的な課題であると言える。そのために、家庭科は快適な家庭生活を送るための学びを生徒同士が関わり合いながらつくりだし、課題を発見し解決する態度を育てたいと考える。

そこで、本校生徒の家庭科における課題である主体性を伸ばし、学び合いの質を高めるにあたり、「新しい学び」として注目されている協調学習を参考に授業をデザインすることとした。

3 昨年度の研究成果と課題から

本教科は昨年度から研究テーマを「生活者として家庭生活の向上を図る授業づくり」と設定し、今年度で2年目を迎える。サブテーマを対話を通して学ぶ「住まい」の学習指導とし、協調学習を主体とした「対話」からの学びについて研究を深め、授業デザインに取り組み、以下のような成果を得た。

- ・「住まい」への関心が高まり、安全・安心な住まい方についての意識が深まった。
- ・家庭が地域と密接に関連していることに気づき、地域の人と関わろうとする意欲が高まってきた。
- ・知識構成型ジグソー法は基礎的な知識の構築に有効であることが分かった。

昨年度のテーマから、生活の向上を図るということにおいて、生徒の意識の高さをワークシートにて確認することができた。住生活の中で生徒が実践できることについて記入させた。「換気をする」が98.7%と家庭生活ですぐに実践でき内容が最も高かった。次に「掃除・片付け」をする、「近隣・地域」への関わりを持つの結果であった。住生活は、こうあるべきであるという決まった解答はないが、安全性や快適さなど誰もが求めるものは共通している。その中で快適な暮らしを手に入れるための住まい方を学び、地域との関わりが日常の生活を支えるものの一つであることに理解が深まったと考える。一方で以下のような課題も見えてきた。

- ・教科学習から社会への関わりについて学習を深める中で、生徒個人の意識レベルでの変化をみとめることはできたが、実際の行動が行われるところまで定着させるために継続した指導を行う。
- ・教科において知識構成型ジグソー法を活かすことができる題材や内容を引き続き研究する必要がある。

昨年度の本校研究紀要総論より、家庭科の授業において生徒アンケートから知識構成型ジグソー法への評価は「授業満足度」は5段階評価において4.1、「理解できた」は81.6%となっている。知識構成型ジグソー法に満足している生徒が94.7%を占めるといった結果がえられた。この結果に知識構成型ジグソー法の授業を肯定的に受け入れていることが分かる。今年度の知識構成型ジグソー法の授業づくりをするにあたり、教材の資料づくりで、試行錯誤に時間を要した。それは、内容の濃さや量は適当であるか、どのような形で生徒へ資料を提供した方が学びの効果が高まるのか、引き続き研究を深め課題や教材、資料の内容等の工夫をしていく必要性が見えてきた。

これらの課題から、知識構成型ジグソー法から教科の特性を活かすための実践的な学習へつなげる計画と教材作りについて、昨年度に引き続き研究を進めることとした。また、社会の様々な変化に対応しながら生活を向上させる未来の生活者をはぐくみたいと考え、本テーマを設定した。

II 本研究の目的

本研究では、現代社会の生活課題を教材とし、知識構成型ジグソー法の対話を深める授業を通して、生徒自身が課題を発見し克服できる力をはぐくむ授業デザインの研究および実践を目的とする。

III 研究内容

1 教科における「対話」とは

(1) 「対話」のとらえ方

授業をデザインする上で、教師が念頭に置くことは、生徒がこの授業で学び合い、成長し合う場をどのようにつくるかということである。授業において、他人の考えを聞いたり、他人に説明する活動を中心にして、少しずつ異なる見方を組み合わせることにより個人の問題をうまく解きながら学習者が学んでいく話し合いをここでは対話とする。主に、ここでいう「対話」は、本校の研究主題でいう協調的な学習を取り入れた内容である。そして、技能教科の特性として製作や調理等の実習において、完成するまでに試行錯誤しながら自己内対話により、思考を深めることも含め対話とする。

(2) 授業を学び合う空間

教育現場でメインに行われている一斉授業と一斉学習は、名のとおり、「学年と学級を定め、一人の教師が多数の生徒を対象に同一の教材で同時に教える」形で、いわゆる「知識伝達型」である。

協調学習は知識伝達型の学習形態とは異なり学習者の主体性が求められるのが特徴である。学習者がグループ活動の中で互いに学習を助け合い、一人一人の学習に対する責任を果たすことで、グループとしての目標を達成していく、協調的な相互依存学習といえる。協調学習は知識構成型ジグソー法(図2)とよばれる授業の型を基盤としている。

知識構成型ジグソー法は、ある課題について複数の視点で書かれた資料をグループに分かれて読み、自分なりに納得できた範囲で説明する内容を準備して交換し、交換した知識を統合して主となる課題を解いたりする活動を通して、学ぶ学習方法の一つである。

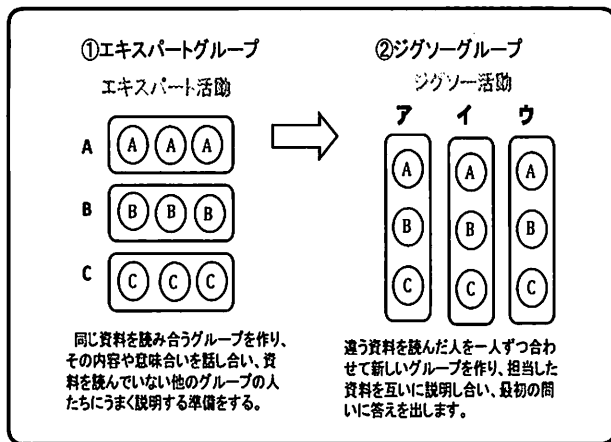


図2 知識構成型ジグソー法のグループ編成

佐藤(1996)は授業といういとなみを認知的・技術的な実践、対人的・社会的な実践、自己内的・倫理的な実践という三つの側面が複雑に絡みあったいとなみである⁽³⁾と述べている。教師は、教科として教えるべき知識やスキルを通して判断力を生徒たちにつけていこうとする。また、それだけではなく、授業を通して生徒と生徒、生徒たちと教師の関係をつくりあげ、生徒や教師が自分を見つめ、授業を通じて成長していくと考える。このような授業をデザインする際、授業での活動のあり方や学び合う関係、そこで使われる教材や教具に注目する必要がある。

生徒が生活課題を自分の人生に重ね、当事者として考えるためには、授業を聴きあう空間にすることが大事になる。なぜなら、考えるという行為は、他者の考えを聴くことから始まる。そのためには、これまで生活の中で当たり前存在しているものを教材とし、教材の役割や種類を調べ、工夫できることや課題など協調的な学習を行うことで、身近な教材に関心が高まると考えられる。生徒や教師が教材を介して自分の考えを出し合う楽しさを味わうことで、学びが成立する。教材について異なる意見を交流しながら、深め合うことにより、個人の思考が一層深まり、良好な人間関係をはぐくみ、温かな学習環境が生まれると考える。そして、家庭科の学習から生活者としての視点を持ち、自分自身の生活を見つめ直す事により、実生活の充実を実感すると共に工夫することで、より快適な家庭生活を送ることができるであろうと考える。

生活の領域から、「衣生活」についての理解を深め、布を用いた製作を通して衣類や小物の機能を考えた上で、材料を選択し、使用方法に合ったデザインを工夫し日常生活を豊かにしていくための学習に協調学習を行う。学習者の立場を中心にした学習が、一人ひとりのわかり方を尊重する協調学習ではないかと考える。

協調学習のポイントとして、次の3点がある⁽⁴⁾。

- ・多様な理解が統合されて考えが深まる
- ・一人ひとりが仲間との関わりの中で、自分なりに納得する
- ・自分なりの納得が適用できる範囲が広がる

2 教科が求める「理解」

本教科を中学生という時期に学ぶ意味として大切なことは、自分について考えることである。個人である自分と社会との出来事とのつながりは見えにくく、また、日常生活に関することも当然のこのように感じ、見えにくくなっている。すべて社会生活において、自分の家庭生活の問題は関連性があり、その問題がどのような位置にあるのか考える事が必要である。それらは、生活にかかわる知識や技術を習得する際にも、自分の生活を見つめ、社会における位置づけを考えることで、自分にとって必要な知識・技術を習得することが重要となる。しかし、私たちの個人の小さな行動が環境問題の改善にどのようにつながっているのかは見えにくい。このような見えにくいものを見えるようにする。つまり、個々の家庭生活から社会に広がる視点を持つことが重要となる。それは、当たり前存在する社会のしくみや制度が私たちの生活に大きく影響していることを家庭科の授業で気づかせることを担っている。家庭科の学習を理解することにより、ひいては私的レベルで自分の生活だけでなく、公的レベルの地域や社会のことにも気づき行動することができるであろう(図3)。

さらに地球全体の環境への影響へも意識が向き、学んできたことをいかすことで、深い理解が得られると考える。

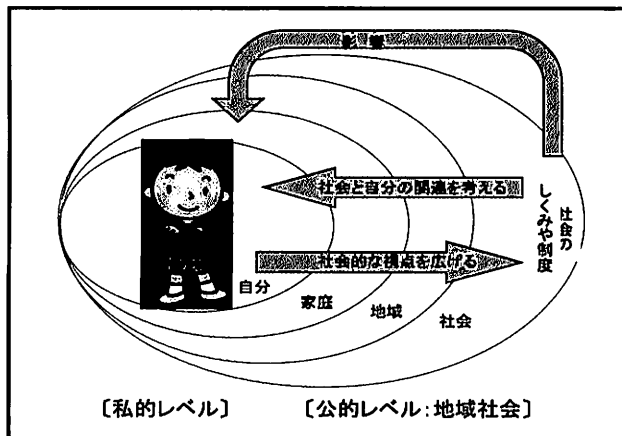


図3 私的レベルと公的レベル

田結(2000)は生活知と学校知について『生活知には日常知、経験知、民衆知、などが包含されるが、家庭科の場合、学校教育で獲得された知識(科学知)や技能(身体知)＝学校知が既存の子どもの日常知や、民衆知の誤りをただしたり、逆に「規範化・固定化・平均モデル化」した学校知を疑うことのできる生活観としての知性の創造のための学びや民衆の知恵に学ぶことも必要となる』⁽⁵⁾と述べている。知識は、多様な環境や場面から得られ認知される。そして、それらは結果として生徒のライフスキルの確立と生活観、人生観を確立し新たな生活知を形成していく。

本教科における「理解」とは、知識を深めることや単純に「わかる」「知っている」という段階をこえて、実生活を向上させる課題、克服したい課題や生徒自身がまだ課題として気づいていない物事に接した時、それが何であるのか、また何を意味する気づけること。そして、正しく判断できることをいう。

3 生活の向上を図る授業

(1) 「家庭生活の向上」とは

自立の考え方をもち家庭科は生活者としての自立を目指している。自立とはすべてのことを自分でできることだけではない。

自立は、自分のことを自分でするという側面だけではなく、できないことは助けをもらうという人との相互関係の中ではぐくまれるものである。中学生であっても、家族や地域社会との関係の中で、よりよい生活を営むことを考えていくことは可能であ

る。家庭や地域社会からの受身的、依存的な生活へのかかわり方から、生活をよりよくするために、自分自身が主体的に生活にかかわっていけるよう転換を図ることを家庭科では目指していく。

生活の向上とは、経済活動に準ずるものを指すのではなく、年齢によるライフステージによって求められる生活、便利さの追求、家庭を支える地域とのかかわりなど様々である。

人は常に変化する社会の中で、生活していかなければならない。だからこそ、生活をよい方へ積極的に進めていくことは大切である。家庭生活において、居心地の良さを感じる事ができる。また、暮らし方や道具を工夫することで、便利で健康・快適な生活を送ろうとする態度をはぐくむ教材を用いた授業を行う。

(2) 衣生活の授業の視点

本研究においては、Cの「衣生活・住生活の自立」において衣生活の学習を中心に布を使った小物の製作を通して授業デザインを行った。小物の持つ機能から材料となる布の性質や機能、デザインの機能をいかした製作活動から学びを深めたい。また、生活の中で使用する物づくりを行うことで手作りの楽しさや完成することの達成感を味わい、作品への愛着から物を大切にしようとする生活行動に結び付けたい。

衣生活から環境問題へと働きかける内容として、衣生活の視点から日常生活の暮らし方を考えさせるため家庭生活や地域社会との関わり気づける生活者としての立場を踏まえた授業デザインとした。

(3) 実践的・体験的な学び

本教科では、実践的であることや体験的であることが重要である。中学生にとって体験的に学ぶことには意味がある。

① 体の五感を使った物事の理解

生徒は、雑誌やインターネット等から情報を得ることも容易にできる。また、生活や社会に関する知識も豊富にある。しかし、それは知識として知っており、体験して初めて本質を理解することも多い。ファッションへの関心や意識が高く、流行のものやブランドについて詳しく知っていても、自分が着用

している被服の成り立ちや素材については無関心な場合も多い。また、実際にどんな構造になっているのか、触れたり着用することで、初めてわかることがある。わかっているつもりの生徒に対して、五感を使って教材によって理解することは重要である。

② 技術の習得

生活は、生活技術を伴って成立している。衣生活サイクルから衣服の選択や手入れ、布を用いた物製作を通して生活を豊かにするための工夫ができることにより、生活の認識が深まり、生活の幅が広がる。また、生活上の問題に直面した場面では、解決の方法が見いだしやすい。

本教科では、小学校から中学校・高等学校と布を素材とした製作実習などで針と糸を用いて、繰り返し学ぶ習得方法がある。これは技術を習得することに意味があり、中学生や高校生になったらできて当然というものではなく、繰り返し練習する機会として家庭科の学習があり、実生活との関連を考えながら技術を実践的・体験的に学ぶことが必要であると考える。

③ 疑問や関心などを次の学びにつなげる

体験を通してわかること、感じることや考えることは多い。何となく疑問を抱いたり、よくわからないが興味がわいたりする場合もある。それらの疑問や関心を明確にすることにより、その後の学習につなげていくことが家庭科の授業では大切である。

4 研究の検証方法

- (1) 知識構成型ジグソー法の授業を展開し、生徒の授業前後の様子や理解がどのように深まったのかというみとりをその都度行い、検討する。
- (2) 授業実践により、ICレコーダーによる会話記録や生徒の授業前後のワークシート等でみとり、検証・考察する。

IV 授業実践

1 2学年実践例

(1) 主題 「わたしたちの衣生活」

ー着ることを生活者として考えるー

(2) 目標

わたしたちの生活の中であたりまえに存在する衣服を取り上げ、快適で豊かな衣生活を営むための基礎的・基本的な内容を学習する。学習内容は、衣服の手入れ、目的に応じた衣服の着用や個性をいかした衣服の着用の仕方、衣服と社会生活との関わりなどについて基礎的・基本的な知識と技能の習得を図り、学んだことを生活の中にかかしていくことを目標としている。

(3) 本実践の目的

前時までの学習内容を基に「個性」や「流行」をどのように捉えたらよいのかを考え、本時の「着ること」を知識構成型ジグソー法によるテーマ別の視点で捉え、これまでの学習を振り返る。本時においては、各自の意見を伝え合い相手の意見を聞き、自分の考えと異なる意見を受け入れたり、自身の考え方を伝える姿勢を身につけていく。また、深まった考えと根拠をもって意見交換を行い、個々の生徒が自身の考えをもつことができると想定される。そして、生徒自身が衣服を大切にし、より快適で環境にも配慮した衣生活を実践するための工夫を見つける。さらに、生活の中で課題を意識することにより、「衣服」や「着ること」を生活者の立場として、「人々が流行を追うと、生活にどのような影響があるだろうか？」というテーマに向き合える。このような学習を深めるために、知識構成型ジグソー法による学び合いを通して、衣生活の学習から生活や環境を見つめ、自分自身の現実生活において工夫し実践することを目的とする。

(4) 実践内容

「人々が流行を追うと、生活にどのような影響があるだろうか？」という課題から、協調学習を通して、前時までの学習内容や生活体験を思い出しながら学びを深めていく。そして、本時のメインテーマである「わたしたち自身は生活の中で、どのような衣服の着方ができるだろうか。」について個人の衣服の着方から環境問題や経済、衣服に関わる仕事をしている人々の立場を考えることで社会と個人との結びつきとを関連付けて日常生活に生かすことができるであろう。

① エキスパート活動

各エキスパート活動における共通課題として、「『流行がわたしたちの衣生活に及ぼす影響』を①よい面、②悪い面をそれぞれの理由も考えてみよう」とした。

表1 エキスパート活動の課題

	エキスパート課題	生徒に期待する解の要素
資料 A	『社会や経済』の視点から衣生活について考えよう	衣服が流行することで、物が売れ、流通が活発になり経済面で豊かになり、社会が明るくなることに気づくであろう。
資料 B	『環境や自分たちの未来』の視点から衣生活を考えよう	多くの人が流行の衣服を大量消費することで、そのニーズに応じて大量生産されることによる公害やごみ問題について話し合いができるであろう。また、物を大切にすることに注目した考え方ができるだろう。
資料 C	『デザイナーや衣服に関わる職業』の視点から考えよう	流行を作り出したり、衣服が売れることにより、仕事への熱意や生きがいを知り、収入が豊かになることを予想できるであろう。

流行が及ぼす影響をよい面と悪い面の両面から考えるようにさせ、考えの根拠をもった上で話し合いができるようにする。また、エキスパート班で互いの意見を聴き合い、分からないことを少人数で話し合わせることで質問しやすくなり、課題への取り組みが容易になる。

② ジグソー活動

ジグソー活動の課題として「わたしたち自身は生活の中で、どのような衣服の着方ができるだろうか」とした。生徒同士の対話により、個々の考えの広がりや、他の意見から学ぶことで、「着ること」を見直し、快適な衣生活をために工夫できることをみつける活動とする。また、各エキスパート資料の課題に対し、話し合いの内容を伝えあい、新たな課題を少人数で話し合わせることで、対話がスムーズに展開するであろう。

③ クロストーク

生徒は他の班が話し合った内容を聴き、同様の意見に共感したり、新たな考え方を認める合うことで、



図4 ジグソー活動の様子

生徒の学びを深めさせる。

前時の学習を基に「個性」や「流行」をどのように捉えたらよいかを考え、本時の「着ること」をテーマ別の視点で捉え、これまでの学習を振り返りながら、各自の意見を伝え相手の意見を聞くことができる。また、深まった考えと根拠をもって意見交換に参加し、考えをまとめさせたい。

衣服を大切にし、より快適で環境にも配慮した衣生活を実践するための工夫はないかを考えることにより、「衣服」や「着ること」を生活者としての視点から見つめ、衣生活についての工夫点をシートに記述できることが望まれる。

④ 実践の考察

(ア) 生徒の学習評価

メイン課題である「あなた自身どのような衣服の着方が工夫できますか」という問いに対し、以下のような生徒の変容が見られた(表2)。

表2 授業前後の生徒の変容

	学習前	学習後
生徒 ① 男子	動きやすい服を着たい。色は、少し明るめで(緑とか...) 季節に合った形	衣服を雑にあつかわず、 <u>ていねいにあつかう。</u> 長持ちする服もほどほどにして、 <u>新しい服を少し買う。</u> 古着は、 <u>新しい服と組み合わせ</u> せし、個性を出す。ハギレや布などは <u>再利用(リサイクル)</u> する。
生徒 ④ 女	季節に合った服 そう	着なくなったボロボロの服とかは、 <u>汚れているところをふいてからごみとして捨てる。</u> 着なくなった服を再利用し

子		たり、リサイクルしたりする。 <u>流行している服と流行して いない個人の好みに合わせた 服を買う。</u>
生徒 ⑤ 女子	季節に合った服、 動きやすい服	同じような服をたくさん買 わない。きれなくなった服は リサイクルに出したり、 <u>シン クまわりを拭くなどしてティ ッシュ等の使用もひかえる。</u> <u>長く使えて、いろいろな組 み合わせのできる服を選んで 買う。</u>
生徒 ⑥ 男子	動きやすい洋服 で行く場所に合わ せる。例：外に出 かける ジーパン とYシャツとか なるべくすぐ洗 えるもの、急に汚 れても対応可能	<u>似たような服は買わない。</u> <u>収納スペースもなくなるし、 結局捨てられるのにもったい ない。</u> <u>なるべく汚さない。汚した ら洗剤の量も増えるし、その まま捨てないといけなくなる かもしれないから。</u> <u>捨てる服もなるべく利用す る。雑巾として、布巾の代わ りとして、いろいろ利用価値 はある。</u>

生徒の変容を見てみると、学習前の男子生徒は動きやすさを重視する生徒が多く、女子は季節に合わせた着こなしについて衣服の着方を工夫する生徒が目立った。学習後は、ほとんどの生徒のワークシートからは下線_____のような資料Bに関連したリサイクルとりいれた衣服の着方の工夫による環境を考慮した記入があった。また、下線_____は個性や個人的な衣服の着方を工夫する内容があった。下線_____は、資料からの学びではなく、実生活により結びついた内容が記入されていた。

(イ) 授業デザインの振り返り

授業は1時間の内容とし、生徒の静かな対話が見られたが、一生懸命にワークシートへ取り組む様子が見えなかった。クロストークでは3つの班が発表し、学習したことを共有することができた。

④の生徒の変容から、知識構成型ジグソー法を通して、既有知識をいかしながら、社会経済や環境、衣生活と関わる人々について、協調学習から個人の学びへと深めることができた。しかし、授業を進める中で以下のような課題が浮き彫りとなった。

- ・生徒が対話しやすい発問を工夫し、検討する。
- ・生徒へ提供する資料の質や量などの内容を検討す

る。

- ・1時間設定の授業内容に対し、ワークシートへ記入する量を工夫する。

(ウ) 実践を踏まえた授業の改善点

[生徒への発問]

本時の学習課題は「～どうしたらよいだろうか」という語尾から、解が拡散することが想定される。それは、生徒の立場からすると何をどう考え、話し合いを進めていくのか困惑させることにつながったのではないかと考える。研究授業後の反省会から、「なぜ（どうして）〇〇だろう？」といった課題設定をすることで、解を収束させ、異なる考え方をすり合わせる対話を導く授業デザインを計画する。

[エキスパート資料とワークシート]

エキスパート資料を作成する時、教科による授業内容や個々の生徒の生活体験からの既有知識を見積り、資料を用意する必要がある。また、題材によって生徒の関心の差が学習意欲に影響してくるため、資料の検討は大切である。そして、新たな知識を構築する内容ばかりでなく、資料を見て安心できる身近で既に知っている内容を取り入れたり、一見すると教科と離れた内容を取り入れるなど、生徒の興味を高める工夫を行う。

エキスパート資料は生徒が対話を十分に行えるよう資料の分量を考慮し、ワークシートは記入に時間がかからない適当な項目に絞った内容にする。

2 3 学年実践例

(1) 主題 「ペンケースを贈ろう！」

(2) 目標

ペンケースの機能がわかり、作り方や「布の大きさ」「布地の選択」「デザイン」にも機能があることを知る。また、ペンケースを使用する人が求める便宜性を考慮したペンケースを製作する。

(3) 本実践の目的

本題材は、学習指導要領のC衣生活・住生活「布を用いた物の製作」からペンケースを製作する。

生徒にとって欲しい物が安価で簡単に手に入る生

活環境において、布を用いた手作りの小物やリメイクした作品は、愛着があり、物を大切に使うことから、生活を豊かにする物としての印象がある。しかし、多くの生徒が裁縫に経験不足なため、本題材の製作では、型が決まって作るのが容易な、ペンケースの製作をすると想定される(図5・6参照)。そのため、製作に目的意識を持たせ、ペンケースの用途にあった布地やデザインに視点をあて、機能について思考し、使用する人が求める機能や個性を話し合い、製作する意欲を高めたい。

本時の学習を通して「生活者としての自分」を意識しながら考え方や価値観を各生徒の生活経験と既有知識を基にした思いを伝え合い、協調学習を通して思考の深まりや思考の視野の広がりにつながっていく機会としたい。また、本時では、製作の計画事前学習を目的とし、次時は個人で製作する型紙を作り、ミシンを用いた製作を計画している。

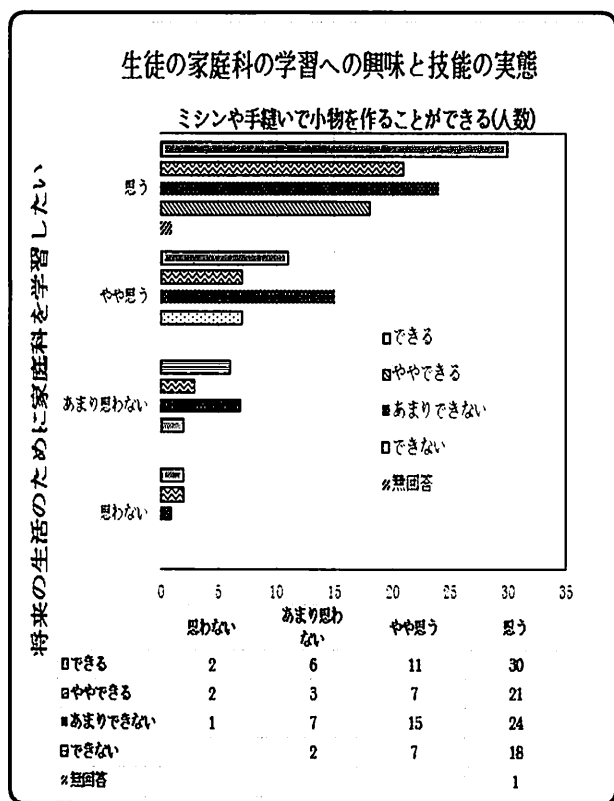


図5 家庭科の学習へ意欲と衣生活における技能の実態 (対象：3学年 157人)

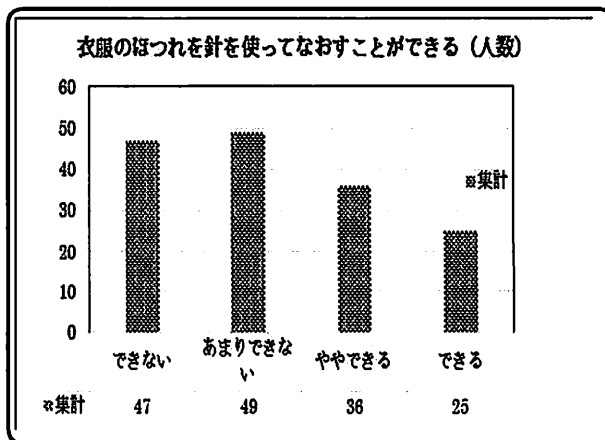


図6 衣生活における技能の実態 (対象：3学年157人)

(4) 実践内容

① エキスパート活動

<エキスパートA> 『布の大きさ』について

ペンケースを製作するにあたり、できあがりの大きさを考えて、縫い代を含めた布の大きさを考える。
課題1 深さ7.5cm、まち3cmのペンケースを製作するときに必要な布の図に()の長さを数字で答えなさい。

課題2 サンプルで渡した「中に仕切りのある(機能)ペンケース」に使用した布の大きさを図を用いて答えなさい。また、どのように考えたのか述べなさい(図7参照)。

[生徒に期待する解の要素]

ペンケースのサイズやデザインによって使用する布地の大きさが異なることがわかる。



図7 エキスパートA 課題2のサンプル

<エキスパートB> 『布選び』について

布地サンプルで布の特徴を確認し、ペンケースに合う材料を布地の性質や機能面から考える(図8)。

課題1 ペンケースの材料に必要なとされる機能の布地を選択する視点から答えて下さい。

課題2 ペンケース作りに適している布を考え、また、その理由も述べて下さい。

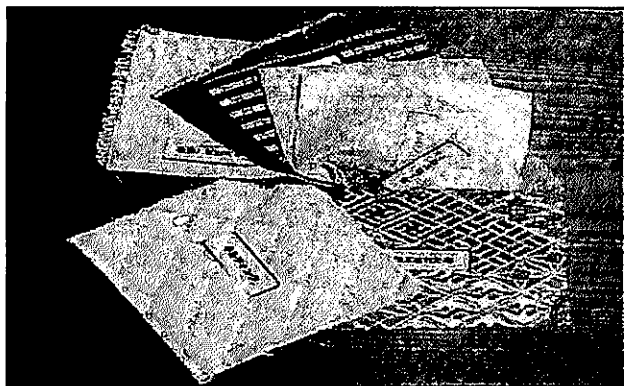


図8 布地サンプル

[生徒に期待する解の要素]

ペンケースは洗濯の回数が少ないため、汚れが目立ちにくく、付きにくい布の特徴がわかり、布選びにいかそうとする。また、身近な小物なので飽きのこない色や柄であることが望ましいことに気づく。

<エキスパートC> 『デザイン』について

ペンケースのデザインは、布の柄や特徴ばかりでなく、形を工夫することで使いやすさや使う人の個性を表現する等の機能があることを知る。

課題1 実際にサンプルを使ってクリップで、俵型のペンケースの形を片側だけ作ってみましょう(図9)。

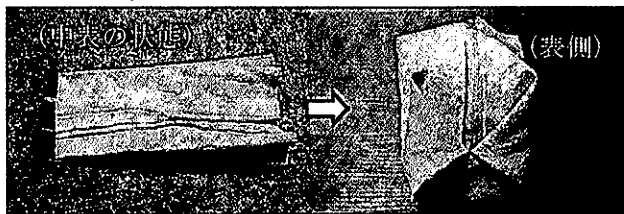


図9 エキスパートC 課題1

課題2 課題1ができれば、クリップを外し、筒状のサンプルを中表にし、他のたたみ方で立体的なペンケースの形を見つけよう！

[生徒に期待する解の要素]

ペンケースは4カ所を縫うだけで形ができることを知る。

筒状に縫われた布を折り両端を縫うことでマチができ、立体的な形に作るができることを知り、布の折り方でデザインを変化させる。

② ジグソー活動

各エキスパート活動で話し合った内容を伝え合

い、メイン課題「3年間、お世話になっているY先生にペンケースを贈る場合どのような物にしますか。」に対して班で、贈りたいペンケースのイメージ、工夫した点、完成図を話し合い考えをまとめた。

③ クロストーク

各グループで考えた「ペンケース」について機能や工夫した点の理由を発表し合い、交流させた。

すべての班が、発表し互いの意見に共感しいたり、感心する様子が見れた。

④ 実践の考察

(ア) 生徒の学習評価

「お世話になったY先生にどのようなペンケースを作りますか」という問いに対し、学習前と学習後に以下のような変容が見られた(表3)。

表3 学習前後の生徒のワークシートの変容

	学習前	学習後
生徒A 女子	大きすぎず、小さすぎず、良いデザインのやつ	デザインも大切だけど、インク漏れしたり、シャーペンの芯が刺さったり、汚れることもあるから、丈夫さも重視して小さいポケットとか機能性があるペンケースを作りたい。
生徒B 男子	コンパクトなものがいい	丈夫で、コンパクトにして、いつも持ち歩けるようなペンケースで目立つデザインにする
生徒C 女子	使いやすいペンケースがいいと思う。	汚れが落ちやすいようにビニール布地にした。コンパクトに持ち運べるように細身にした。先生っぽいデザイン先生のイメージに合わせた革などがあってもいいと思いました。
生徒D 男子	厚い布の方がいい。デザインを工夫する。	サイズは小さめ、布はキャンパスで色はチョコカラー、横開きで多機能なペンケース。

表4 生徒の発話記録(クロストークより)

グループ①	Y先生らしさを取り入れた。Y先生は綺麗好きなので、よごれにくくした。 完成図は大人の人よりも子どもより持ち運ぶものが少ないので細く。白色の本革。
グループ②	工夫したところは、柄と形、Y先生らしいグッピーのデザインで、完成図はしっぽにタグ、背中にチャックが付いている。
グループ③	Y先生はシングルぼいなので、しんぐるにして、山羊とグッピー好きなので、山羊のアクセントとグッピーバッチを付けました。
グループ④	山羊の形にし、カイロ入れる袋みたいなもので、チャックを開けたらカイロしまう形。Y先生はまめな人だから、シンプルなものがいいと思ったが、最近、元気がないので、これを見て明るくなってほしいという思いで作りました。あと山羊の周りに英語を入れて英語の授業頑張るって欲しい。
グループ⑤	デニムが渋いから似合う。特定のペンカネームペンしか持っていないと思うから、小さめの形、山羊のデザインを取り入れました。
グループ⑥	大きさはポケットに入る程度、デザインはカラフルにしました。

ペンケースを贈る対象となる、教師の個性と生徒の思いやりが感じられる発表となった(表4)。それに伴い、製作意欲も高まった。

(イ) 授業デザインの振り返り

前年度に衣生活実習の布を用いたシステム手帳カバー作りでは、技能面でうまくいかず苦戦しており、製作には消極的であろうと考えていた。それは授業前のワークシートの問いで「どのようなペンケースをつくりたいか」の記入内容が少ないことから想定していた通り、簡単な表現で手作りのペンケースに対して製作意欲が低いことが分かった。

授業後のワークシートによる授業前と同じ問いに対する解答は、記入項目も多く、製作する上で工夫したいことなどが書かれており、生徒の製作意欲の高まりが強く感じられた。授業デザインで布の繊維の種類や性質、布の形の変化など、知識の高まり

を期待しつつ、体験的な教具を取り入れたことが影響したの推測する。また、本時から製作するものは自分のものではなく、贈り物として手元を離れることを前提としており、いつも以上に慎重に考える姿勢が見られたのかと考えられる。しかし、話し合いに消極的な生徒は、学習後のコメントの記入がかなり少なかった。

本時の学習で、Y先生のイメージが先回りしてしまい、対話が学習の内容から離れてしまいそうな場面があった。近づいて、声をかけると学習内容に沿った話し合いとなった。

[生徒の既有知識の把握]

生徒は、小学校から昨年までの教科の学習から裁縫の用語や用具の名称などが曖昧な状態で、説明書きを資料に載せたが、しっかりと理解できている様子ではなかった。生徒の過去の学習を知識として定着が厳しい状況が浮き彫りとなった。

生徒は、課題に向き合い考える力がはぐくまれていることと基礎知識が同じレベルではなく、既有知識の見積もりにギャップがあることを認識する必要があることが分かった。そのため、これまで積み重ねてきた知識であっても繰り返し、学ばせる事が重要となる。

(ウ) 実践を踏まえた授業の改善点

話し合い活動を充実させるため、ワークシートの記入項目の精選を行った。生徒の意欲が1週間後の授業まで持続させるために、生徒が見通しを持って学習内容を把握できる、次時の授業につながるワークシートの項目を検討を行う。

今回、エキスパート活動の1つで布のサンプルを用いて布の性質や機能を学習させた。サンプルを用いた場合、サンプルから学び取らせるためにも布地の説明は最小限の分量を提示した方がいいのか引き続き検討する。

今回の授業は、製作実習を行うためにエキスパート資料の必要部分をいかして授業であった。しかし、生徒は与えられた資料を理解することが重要ととらえている部分があり、授業のはじめと終わりに資料に頼りすぎることなく、自らの新たな考えや意見を出し合い、ペンケースを作るというその趣旨をしっかりと伝える手立てをする必要があった。

V 成果と課題

[成果]

衣生活の製作実習が計画から製作、完成まで5時間で行えた。これは、知識構成型ジグソー法を取り入れたことによる効果が高い。製作に必要な知識を教えあうことがスムーズにできたと推測される。また、完成した作品は、個人差があるものの学習内容が活かされているものが見られた。布の折り方を工夫してポケットを付けたものや市販品のように丁寧に仕上げた作品が数多く製作された(図10)。

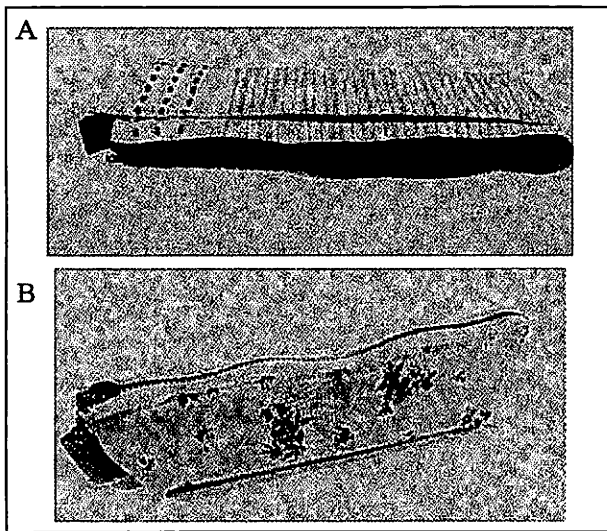


図10 生徒作品

A : 布の折り方を工夫して外側にポケット部分を作った作品
B : ペンケースに底ができるように布を折り布にあったタグをつけた作品

衣生活の学習を通して、ペンケース作りの材料にハギレを使用したり、着なくなったデニムを使用したりと、物への愛着を持つ姿勢が芽生えてきた。それは、授業中の生徒の発話記録の中から、いろいろと試行錯誤して対話の最中に『早く作りたい。作って私が貰おう』と何気ない独り言のような言葉から読み取ることができた。発話記録をとることで、ワークシートでは把握が難しい生徒のつぶやきを得ることができた。

今回のペンケース作りの授業を通して、生徒の環境へ配慮する行動が見られ、関心が高まりを認識できた。それは、材料を各生徒に準備させたところ、布の材料に着なくなったデニムを切り取ったり、使用していたタオルやハンドタオルなどを選択した作品が製作された。

[課題]

知識構成型ジグソー法における資料作成やワークシートの検討は引き続き、教材研究の一環として重要である。知識構成型ジグソー法の授業を教科の年間指導計画において、どの領域で実施し、生徒が負担に感じないような授業時数と授業デザインを展開していく必要がある。

<註>

- (1)第2期 教育振興計画
- (2)国立教育政策研究所教育課程センター
・「特定の課題に関する調査(技術・家庭)調査結果(中学校)」平成21年
- (3)佐藤学『授業研究入門』岩波書店1996年 p15-16
- (4)東京大学・大学発教育支援コンソーシアム推進機構「CoREFへようこそ」
<http://coref.u-tokyo.ac.jp>
- (5)福田公子 間田泰弘 編集『家庭・技術科重要用語300の基礎知識』2000年 p31

<参考文献>

- ・文部科学省「中学校学習指導要領技術・家庭科編」平成20年3月告示
- ・「評価基準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」(中学校技術・家庭)平成23年11月
- ・後藤久・沖田富美子[編著『住居学』朝倉書店2003年
- ・秋田喜代美『子どもを育む授業づくり』岩波書店2000年
- ・山口榮一『授業のデザイン』玉川大学出版部2005年
- ・堺豊子・伊藤セツ『生活科学Ⅰー生活財機能論ー』2002年
- ・秋田喜代美 キャサリン・ルイス [編著『授業の研究教師の学習 レッスンスタディへのいざない』明石書店 2008年
- ・琉球大学教育学部附属中学校「2013第26集研究紀要」